

ペリヘリオンの焰

著者	不泯生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 8
ページ	1 7 3 - 1 7 4
発行年	1915-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6508

物すごき地獄の夜更一人寝に山家集をば讀みふけりにき。
我もいざ同じ思ひに叫ばなむ「寂しさなくば住み憂からまし」。
人あらずこのあたりに人は人あらず高く叫べど淋しさは湧く。
執着は夜峰かあらず湯かあらず別れともなきこの静寂かも。
夕暮を小高き丘に一人居て寒さにたへず歸る心も。
死にと行く人のことなど事もなう問はず語りに語る女等。
人死なば山荒れするが恐ろしとそれのみを言ふ女めでたし。
朝風に人なき山の木に倚ればはらほろろと落葉するかも。

ペリヘリオンの焰

一、二、兩 不

混

生

わがこゝろ木の芽のあまき香にむせびペリヘリオンの宮殿に入る。
むらさきの冷めたき色の小石ひとつきみが息吹に燃えそめにけり。
われをやく何の炎ぞ新らしきよみがりの日來るといひて。
哲人のふるきことの葉壁にかきまもり行く君驢馬に似るかも。
何ごとぞきみが命の絶ゆる日か赤まるの出し朝のかなしみ。
桃いろのうす絹きりて戀のうたかきてながめし春雨の宵。

君もわれもキヤラメルのごと箱のなか大日本のすよりなきかな。
なすことゝ思へることゝどこしへに二つの道をならべたるかな。
歡樂の鸚鵡はにげぬわが胸の格子の銀のうすくもりかな。
悲しきは口のまわりの疎髻かな少年ごものあざ笑ひかな。
時をりの人ごみの中街道をひたばしりするかなしき癪かな。

青

き

火

三部一年 古

野

秀

谷

新調の服の釦の心地よく晴れたる空に光りかへすも
瞳あぐれば阿蘇の火山は嚴かに大青空に雲吐きてあり
阿蘇山の吐く白雲のひろごりて夕の空をつゝみ行くなる
身のつかれ心の痛み癒やしけるわが熟睡の尊かりし朝
今宵のごと闇き夜なりき人燒きが父焼くために焚きし青き火
物思ふと眉寄するなるならはしを姉も持ちけり淋しき今宵
み佛はそがひになりていまさすや今のくらさに死の來るらし
沈み行くわが此頃の心暗し氣をとりおほし街に出でなむ
いひ出でん言葉もつきてむささしの密柑を食めり詮すべをなみ